

「学びを次の世代へ」

荒川中学校 さかい 坂井 つばさ 翼



広島に行く前は、原爆はどこか遠いものだと思っていました。しかし、広島に行き、原爆が実際に投下され、今でも誰かを苦しめていることがわかりました。そして、現地に行ったことで、原爆の悲惨さだけでなく、広島の復興について新たに知ることができました。また、唯一の被爆国として核の恐ろしさを伝える日本の凄さを感じることができました。私たちは、被爆体験を直接聞ける最後の世代です。その話を「悲惨だった」や「怖い」などで終わらせず、現実にしたこととして受け止め、次の世代に伝えて行くことが私たちの責任なのではないのでしょうか。

「平和に向けて」

神林中学校 さいとう 齋藤 るあ 瑠愛



私は、この広島派遣を通して、原爆がとても恐ろしく、永遠の苦しみをたった一瞬でつくるものだと思います。この原爆により、現在もなお苦しんでいる方々はたくさんいます。一方で、そのような苦しみにも立ち向かいながら平和に向けて行動もしています。私たちは81年前に被爆された方々に直接声を聞くことのできる最後の世代とされています。恐ろしいからといって目を背けず、知ろうとする。そして、実際に起きたという事実だけでなく、被爆した方の思いを知り、考えることがこれからの平和の実現につながるのだと思います。



「私たちが考えること」

朝日中学校 さいとう 齋藤 わかな 若菜



私は、この広島派遣事業で、被爆国に住む私たちにしかできないことがあるのではないかと思います。それは、私たちから平和について声をあげていくことです。一人で「平和になってほしい」と言っても何も変わりません。みんなで声を上げることに意味があるのです。広島で被爆された方々は今も、原爆症に苦しみながら、それでも世界に平和を訴えています。私たちは日本に住みながらも、どこか昔の話で、終わったことのように感じるかもしれませんが、それでも原爆を経験していない私たちにできることはあるのではないのでしょうか。

「原爆と戦争の恐ろしさ」

山北中学校 とがし 富樫 りゅうおん 龍音



広島派遣事業を通して、実際に原爆が落とされた現地で色々なものを見て、戦争や原爆は自分が参加する前にもっていたイメージでは表せないくらい残酷さや恐ろしさがあるものだと感じる事ができました。今、この世界で平和に楽しく暮らす事ができているのは当たり前ではありません。今でも戦争をしている国や原爆を作ろうとしている国はあるので、そのようなことは今後しっかりと無くしていかなければなりません。学校や地域の人たちに、学んだことをしっかりと伝えて、戦争が起こらないように少しでも貢献していきたいと思っています。

中学生広島派遣事業

平和の尊さを 次世代へ



問 学校教育課教育総務室 (☎72-6882)

市では、将来を担う若い人たちに戦争の悲惨さや平和の尊さを考え、理解を深めてもらうことを目的に、中学生広島派遣事業を実施しています。

今年度も、市内7中学校の代表生徒7人が8月5日から3日間、広島市を訪問しました。5日には、平和記念公園にある「原爆の子の像」に、市内の中学生が思いを込めて折った千羽鶴を奉納し、戦争で亡くなった方々のご冥福を祈りました。その後、原爆ドームや平和記念資料館を見学し、被爆の実相を知るとともに、平和な世界を築くことの大切さについて考えました。

原爆投下から81年を迎えた6日には、平和記念式典に参列しました。子ども代表の小学生による「平和の誓い」からは、自分たちが被爆体験を直接聞くことができる最後の世代であること、平和への思いを自分なりの方法で表現することの大切さを感じ取っていました。その日の夕方には、平和への願いを灯籠に書き込み、もとやすがわ元安川での灯籠流しに参加しました。

「広島で起きたことを忘れない」

村上第一中学校 かとう 加藤 ひろと 大翔



平和記念資料館では、原爆によって亡くなってしまった方々の声や、原爆によって変形したものなどが展示されていました。亡くなってしまった子どもの弁当箱は、熱により中身は黒く焦げていました。その展示物と一緒に「弁当を楽しみにしていましたが、食べることはできませんでした。」と書かれており、胸が苦しくなりました。

この事業を通して、戦争は絶対にあってはならないし、何より原爆の使用があってはならないと思いました。約80年前に広島で原爆が投下された出来事は絶対に忘れてはいけません。被爆者の体験を聞くことができる最後の世代として、世界平和の第一歩として、私達には伝える責任があるのです。

「平和への想い」

岩船中学校 えぐち 江口 そうた 空汰



平和記念式典で感じたことは、日本人以外にも色々な国の方々が参加していてとても嬉しかったし、平和に国の違いは関係ないということです。それらを感じられた素晴らしい会でした。そして、その日の夕方には灯籠流しにも参加しました。初めてで少し緊張しましたが、自分の平和への想いを書き、一斉に流れていった灯籠を見て、より戦争というものがなくなり、平和な世界が訪れたらいいなと思いました。

「戦争は今の日本には関係ない」とか「戦争は昔の話だから」などと思っている人がいるかと思います。しかし、だからといって他人事にははいけません。自分事として考え、戦争の危険さ、平和の大切さをみんなで考えていきましょう。

「死んでしまう悲しみと 生き続ける辛さ」

村上東中学校 かわうち 川内 しんじ 伸仁



私は、この事業全体を通して、以前の自分がどれだけ原爆に対しての認識を軽く見ていたのかを実感しました。広島は原爆は、単に戦争中の攻撃を受けただけでは済まされないほどショッキングな出来事だったのです。何万人もの命を一瞬にして奪い、町を、そしてそこにあった人々の思いを消し去ってしまった原爆。さらに81年が経過した今もなお、被害に苦しんでいる人々を生んでしまった原爆をまだ所有している国がある。実際にそれを使おうとしている国があるということは、自ら地獄をつくらうとしていることと同じだと私は思います。あなたが広島を実際に訪れ、見学した時、何を感じるのでしょうか。平和の尊さを一人一人が考えることこそが、被害者の方々の心の傷が、少しでも癒える唯一の方法なのだと私は思いました。

